

商学部 教授 太田和博

神田校舎から歩いて数分の地に集英社のビルがある。1階のミニスペースで、昨秋に一条ゆかり集英社デビュー50周年記念のパネル展示がなされていた。

一条ゆかりは集英社の月刊誌『りぼん』において注目を集めた漫画家である。2007年には『プライド』で第11回文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞を受賞している。『りぼん』は講談社の『なかよし』、小学館の『ちゃお』と並ぶ三大小中学生向けの漫画雑誌である。

一条ゆかりはその中で異彩を放っており、1974年に連載された『デザイナー』は大きな話題を呼んだ。大学生のころ『デザイナー』を読んだ私は衝撃を受けた。小中学生向けの少女漫画ではなく、普遍的なテーマを含んだ人間ドラマが展開されていたのである。約45年の時を経ているが、時代を先取りしているがゆえに、今でも刺激的である。

一例を挙げよう。『デザイナー』の主人公であるファッションモデルの名は亜美である。姓がない。孤児院で育ったため、実の親が不明であるため、姓を付けずにモデルになったという設定である。いまでは多くのアーティストが名のみで活動しているが、当時は皆無であり、極めて特異な設定であった。

独創的な創造者は、漫画家であれ、作家であれ、時代の先を行く。時代を先取りしたいのであれば、芥川賞は必読である。芥川賞は、先を行き過ぎるがゆえに現代を生きる者には違和感がある。もう私は芥川賞を読むのは疲れるが、未来を生きる学生はそれに触れるべきである。

デザイナー / 一条ゆかり著 ; 前編, 後編.
集英社; 1976.7-1976.8.-- (りぼんマスコット
コミックス).

生田分館 K/726/113

デザイナー / 一条ゆかり著
集英社, 1996.12(集英社文庫)
生田分館 X/080/Sh99/1ch